

ティーチングポートフォリオ

美術学部 美術表現学科

准教授 立花 布美子

1. 教育の責任

美術学部美術表現学科において担当する領域は、基礎科目、工芸分野、応用科目を担当している。その担当している科目には、中学校教諭一種免許状（美術）や、高等学校教諭一種免許状（工芸）も含まれている。主な担当科目のうち、美術表現学科の選考科目は以下のとおりである。

領域	科目名	形態	対象学年	開講時期	単位数	必修区分	免許資格
基礎科目	工芸基礎Ⅰ (プロダクトデザインを含む。)	実技 オムニバス	1年	前期	2	○	中高一種免許(美術)必修 高一種免許(工芸)必須
	工芸基礎Ⅱ	実技 オムニバス	1年	後期	2		
工芸	陶芸Ⅰ	実技	2年	前期	2		中高一種免許(美術)選択 高一種免許(工芸)選択
	陶芸Ⅱ	実技	2年	後期	2		高一種免許(工芸)選択
	陶芸Ⅲ	実技	3年	前期	2		
	陶芸Ⅳ	実技	3年	後期	2		
応用科目	卒業研究Ⅰ(陶芸)	演習	4年	前期	6	○	
	卒業研究Ⅱ(陶芸)	演習	4年	後期	6	○	

2. 教育の理念

工芸とは、ものづくりとは何かを歴史や文化、現代の工芸などの多種多様な視点から、工芸に関する理解を深めることを目指す。工芸分野では陶芸、染織、漆芸の3分野を専攻できる。その中の陶芸において考え方を学び、陶芸における基本的な知識や技術を学び、さらにプレゼンテーションを含めた展示発表をとおして相手に伝える実践的な力を身につけるよう指導している。また、様々な表現方法を教員と共有しながら陶芸の可能性を追求していきたいと考える。

3. 教育の方法

工芸基礎では、陶芸、染織、漆芸の3分野に関する基礎知識を理解するため、講義形式（オムニバス）による各作業工程や現代の伝統工芸について教授する。作業工程を実践していくために3分野に分かれるが、陶芸では基本となる土練りの練習の他、制作方法の意味を学ぶ。更に各道具の使用方法や、工房内での「安全」に制作を遂行するための理解として土練機や各窯の使用方法を学ぶ。全学年の学生が気持ちよく制作できるための環境づくりも重要となるため、使用する道具だけではなく工房内の清掃も欠かせないことを理解させ、自身の制作以外のことで積極

的な姿勢を見ていきたい。講評会では一通りの作業工程を経て完成した作品でお茶を飲み、持ちやすさ、飲みやすさ（口当たりの確認）、お茶を入れた時の重みを感じ、最後は洗いやすさを体感してもらうことで、学生自身が次年度への制作に対する課題や取り組む姿勢の手助けとなるのではないかと考える。

陶芸Ⅰ～ⅣではⅠ年次で理解した作業工程を踏まえて、様々な技法を取り入れた表現を試み、効率よく作業できるよう、計画立案のアドバイスをを行っている。また、制作過程で生じる失敗部分の見直しを繰り返すことで、各自の制作ペースを理解できるようになる。これは教職課程で実際に中学校、高等学校の現場において指導する立場に置き換えれば、生徒のミスした原因を理解することができ、指導者として適格なアドバイスができる実践にも繋がる内容ではないだろうかと考える。「上手にできた（完成度）」だけではなく、学生同士で協力しながら問題解決を探っていく能力を、各課題を通して身につけられるよう工夫している。

更に卒業研究では、陶芸を通してどんな表現者でありたいか、ディスカッションを重視した授業づくりに努めている。実際には卒業研究の前段階として陶芸Ⅳの中で釉薬開発の理解と焼成実験を試み、卒業研究へ繋がるための技法・技術の向上だけではなく、制作に関わるコンセプトの面からのモノの見方、とらえる力が備わるよう、フィードバックを繰り返し何度も行っている。

4. 教育の成果

今年度、学内で実施している授業評価アンケートの結果を以下の表に示す。

授業科目名	開講時期	全体回答率	履修者数	回答数	回答率	総合評価
工芸基礎Ⅰ（オムニバス）	前期	84.0%	52	45	86.5%	4.72
陶芸Ⅰ			26	24	92.3%	4.63
工芸基礎Ⅱ（オムニバス）	後期	80.5%	45	40	88.9%	4.76
陶芸Ⅱ			22	22	100%	4.92

令和3年度～令和5年度の授業評価アンケートでは優秀者として評価された。また単独の担当科目として、今年度の陶芸Ⅱでは回答率 100%で総合評価 4.92 の高評価を得ることができた。ここ数年、Google フォームでの授業評価アンケートを実施していたため、回答率が低迷するという結果であったが、紙媒体での回答に戻り実施したことが高回答率へと繋がった。10 年以上授業評価アンケートを実施している中で、100%の回答率を得ることができた科目は以前にも数回あったが、更に 4.9 点台の評価を得られたことは評価できる。

毎回自由記述は少ないものの、批判的な回答は見受けられない。ディスカッションを通して土によるどんな表現を目指したいかを重視しているためか、質問②教え方について 9 割が 5 点台の評価を得た。また、履修者が多く制作環境に影響がみられることから、急遽時間割を 2 グループに分けることになったにも関わらず、対応してくれた学生に感謝したい。一方、必修科目である工芸基礎や、教職課程で必要とされる陶芸Ⅰの科目などで、取り組む姿勢において意欲的でない学生も一定数いるため、低い評価を付ける学生が毎年 1 割程度見受けられる。意欲的にこなし、

達成感が得られるよう、授業の進度や板書において事前準備の徹底をはかりながら、学生の意見を反映させていきたい。

授業評価アンケート以外での成果として、ここ数年、県内外でのコンペで受賞する学生など、学外での発表の場を広げ、学生同士が共同し切磋琢磨しながら陶芸に打ち込んでいる姿が見受けられる。授業以外での先輩方の姿を見せることで次に活躍する学生が自然と繋がりを作っていける、そのような環境づくりを目指し、学生の後押しをしていきたい。

5. 教育の改善と今後の目標

工芸の実習において、受講数に対して工房内の機材台数、作業スペースの確保や、一番は一人ひとり制作と指導に向き合える最大人数に乖離が生じないよう、特に受講数が多い工芸基礎、陶芸Ⅰの科目は毎年工夫してきたが、なかなか理想通りには進まないのが実状である（理想は教員１人対して履修学生１０名）。必修科目である工芸基礎は陶芸の基礎知識理解と制作実習時間が圧倒的に少ないため、シラバスの内容を何度も改善を繰り返している。習得して欲しい様々な技法を教授するには、SAの協力を得ながら、学習意欲を低下させないように努めていきたい。

その他にも陶芸の在り方を探っていくため、表現者である意義を問いながら、土と徹底的に向き合い、陶芸を通して社会に求められる学生を育てていくことを目標として取り組んでいきたい。そのためには、学生との対話を通して作品に反映できるよう、学生の今を知ることが不可欠と考える。学生時代にしかできないことを形にできる強みを様々な面から常にフォローしていきたい。